

宿縁

十一月号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七—三七二—〇二九二
FAX 〇四七—三七二—〇二六二

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

念仏道は浄土から

つけられた道



手元に、非行からの更生を誓ったある少女からの『「おかえり」の一言がほしかっただけ：』という一文があります。

『「あんなんか、帰ってこんぼうがエエのに：。あんながいたら、家の中グシヤグシヤになるわ：」

少年院を仮退院したその日に、お母さんに言われた。わたしの居場所なんかどこにもなかった。寂しかったし、悔しかった。一年間過ごした少年院を出る時、「こんな

に変わった私を見て！絶対がんばるから、信じて！」と心に誓っていた。大好きなお母さんにだけは、わかってくれなかったのに：。「おかえり」の一言が欲しかった。ただけなのに：。涙がこぼれそうになった。そのまま夜の街へ飛び出した。』

母親のぬくもりだけが思い起こされたのに、そこに居場所のないことを知った彼女が再び自分の居場所を求めて夜の街へ消えていった心境を思うと胸がふさがります。

私たちは、物心ついたときから見られるもの聞くことに心が左右されて穏やかでいられません。人によって多少の違いはありますが、生きていく限り朝から晩まで心は波打っています。

それはすべてが関係性によってあるからで、仏教では「縁起(えんぎ)」といって、私たちの存在は縁によって生じ縁によって滅するのだ、と積尊は教えます。

近頃よくいわれる「生きづらさ」とか「生き苦るしさ」というのも、すべてのものが関係性にあるからで、自分一人で成り立つものなど一つもないという証しです。

およそ八百年より昔、親鸞さまは、そういう煩わしさの世間から離れば平穏を保たれるかと「出家(しゅっけ)」の道を選びました。すべてをありのままに見、「無私(む

し)」の心を磨き、み仏に学ぶ二十年間の比叡山での修学の有様は、

「定水(じょうすい)を凝(こ)らすといへども識浪(しきろう)しきりに動き、心月(しんがつ)を観ずといへども妄雲(もううん)なほ覆ふ。：：：」(嘆徳文)

と、存覚上人によって伝えられています。

(ああ、あの定まった琵琶湖の湖面のように、どうして私の心は定まらないのか。おさえようとすればするほど、識浪(欲や怒りなどのこころのなみ)が逆巻いてしまふ。ああ、あの欠け目のない月を見るように、なぜ、さどりの月が見れぬのか。みだらな雲がわき上がり、心の天をおおい隠す。：)

この文章からは求道における生々しい苦闘の様子が伝わってきます。

自らの心を励まし、平静を保とうとすればするほど、そこに精も根も尽き果てられた親鸞さまは、山上での二十年間の天台、法華の教え(戒律を守り、煩惱と闘ってさとりを得ようとする教え)に絶望され、ついに下山を決定されました。

それはやがて生涯の師と仰ぐ法然聖人の出会いでありました。肩にまったく力みのない、穏やかで温かなまなざしから発せられる一語一語は、乾ききった親鸞さまの心に染み入ったことでしょう。

「お互い、自ら起こる煩惱から解放される道が断られたものにこそ、すでに、ゆるぎない真実の世界(阿弥陀仏)から呼びかけられている道がある。

そのはたらきは南無阿弥陀仏という言葉となつてすでにここに届けられている。

ほんとうの安らぎとは、この仏心(人間の本质を見抜いたがゆえの向こうから起こした大慈悲心)一つにまかせざるはかはないではないか。

縁によって変化するわが心をたよりとする道は何処までいっても不安しいか。一緒に仏法を聞き、お念仏申そうではないか。不思議と開く一筋の光の道がある。」

どこまでも自分を深く見つめた先人たちの教えや言葉に触れたとき、私の心に大きな転換をもたらせました。

法然聖人も親鸞さまも、それぞれに自身を見つめられ悩み抜かれたすえに、念仏、本願他力にめぐめられました。表現はそれぞれに違いますが、私を念ずる仏の眼差しも、世の中と人生のありのままの真理に気づかせんとする仏の願力も、われより先に来ているということなのです。

親鸞さまのお言葉、「慶ばしいかな、心を弘誓(くげい)の仏地に樹(た)て、念(おもい)を難思(なんじ)の法界(ほうかい)に流す。」が万人の心に響きます。

弘誓の仏地とは仏の大地ですが、それが凡夫の大地でもあります。凡夫の私たちは見失なっているけれども、向こうからはたらきかけてくる願いの言葉が、こちらに聞こえるなら、聞いた心にとつては仏の大地が凡夫の大地になるのです。それが転換です。

私たちが本心に立てる場を仏土と教えます。「心を弘誓の仏地に樹」というのは樹木が立つように仏の大地に立つのだというイメージですが、そこに帰ることによって本心に安らかに立ち上がれるという場所です。

【寺灯雑記】

○「仏教の死生観」を末木氏が講演
10/29

第28回中原寺文化講演会は、市川駅そばの山崎製パン企業年金基金会館を会場に、東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授の末木文美士先生を京都からお迎えして開催されました。

「仏教の死生観」と題した講演にはおよそ220名が遠近各地から来場しました。

前半では近代における死と死者のゆくえについて、主に神道と仏教の思想から話され、後半では死者と菩薩、親鸞聖人の往相・還相の教えについて言及した内容でした。

当日のアンケートから寄せられた皆さんからの意見感想の一部を紹介します。

☆講演内容を理解するまではいきませんでした。考えていくきっかけになりました。(50代男性)

☆聞きづらく、期待したほどではなかった。教行信証の話をもう少し詳しく聞きたかった。往相・還相のことは良かった。(70代女性)

☆毎年すばらしい講演を企画し有難うございます。主催者並びに各講師の先生方に感謝！(80代男性)

☆高名なる末木先生の講義を拝聴でき恐悦至極。自分は日蓮宗に属する者。よく生死の話題あり、浄土を通じての今日の講演は、他宗思想の側面を知ることができました。(40代男性)

☆有難うございました。親鸞にたどりつくまでの話、難しかったです。(60代女性)

☆親鸞の言う信心の思想が日本人の死生観に最も適合すると思うが、人それぞれの心の持ち方で生死を迎えたい。(70代男性)

☆内容の一部が現代アニメや漫画にも投影されていることがわかり、それらこそ宗教は大きく成長(広まる)するのではないかと思う。また、プラスの輪廻ははじめて聞き、素晴らしい考えだと感じた。(20代男性)

☆1977年大学1年生の時に目を通した「日本人の死生観」を思い出しました。その時以来の感動です。(50代男性)

☆先生のコラムを時々拝読していますのでお逢い出来てうれしいです。おだやかな語り口、やさしさが伝わりました。年を取り生老病死の存在を深く感ずることが多くなり、今日の話はとても有意義でした。研究者から見た死生観ももう一つの視点として興味を持ちました。(70代女性)

☆親鸞聖人の教え、往相・還相の大乗思想を、田辺元、上原専祿が死の哲学として理解することができました。すばらしい講演会ありがとうございました。(50代男性)

☆生と死と老いを考え、身近に接する人(親)を通して考える最近ですが、誰でもやがて来る死について、もつともつと向き合わなくては、学ぶ事の大切さを考えました。(60代女性)

皆さまからのアンケートへのご協力に心より御礼申し上げます。

○千尋ちゃんが初参式にお詣り
9/23

今年4月に待望の一子を授かった本間航平・美穂子さんご夫婦が、可愛い千尋ちゃんの初参式にご親族共々にお詣りされました。子ども式章と念珠を贈られ、前任さんから「やさしい心で のびやかに たくましい人生であれ！」という言葉を貰いました。式を見守る祖父母のうれしいお顔もまた印象的でした。

○浄土園で秋の収穫祭を楽しむ
11/3

浄土園の畑で見事に収穫された薩摩いもや里いも、それに勤労に感謝する仲間、15人ほどが集まって今年の収穫祭を行いました。焼きいも、蒸かしいも、けんちん汁、焼き肉、それにビールなども加わって小春日和のもとで秋の味覚を楽しみました。

○お仏具磨き、清掃作業へ奉仕
11/5

お莊嚴仏具のお磨きや境内などの清掃に、多くの方が参加奉仕してくださいました。お仏具磨きには初参加の人もあつて、およそ男女40人、お互いにチームを作って磨き具合をたしかめながら和やかに清掃作業が進められました。

○報恩講にお仏飯米を進納

- *橋口俊信様 (市川市)
- *福島道宏様 (八潮市)
- *錦織春海様 (市川市)

【ご案内】

☆親鸞聖人報恩講法要修行

*十一月二十日(日)

(夕方から参道に和紙絵灯籠が灯ります) 五時：親鸞さまを讃える音楽の夕べ

— 讃仏歌と日本の名歌 —

(佐野京子さん演奏)

五時半：法要(初夜礼讃)

引き続き法話：住職・前任職

おとき(あずき粥接待)

*十一月二十一日(月)

六時半：朝のお勤め(正信偈)

十一時：日中法要(讃仏偈)

引き続き法話—いのちへの眼差し

正午：おとき(精進料理接待)

一時：満座法要(正信偈)

引き続き法話—日本人の宗教意識

布教使(慈願寺住職 池田行信師)

(浄土真宗では最も大切な二日間にとわり営む仏事、心してお参りしましょう。)

【法座・行事案内】

○いのちの居場所を考える会

十一月二十四日(木)十時半

○和讃に学ぶ 十一月二十六日(土) 三時

○婦人会法座 十二月三日(土) 一時

○門信徒会役員会 十二月三日(土) 三時半

○壮年会法座 十二月十日(土) 三時

○年末懇親会 十二月十日(土) 六時

○清掃奉仕 十二月二十八日(水) 十時

【十一月の掲示板のことば】

過去にこだわる者は

未来を失う